

# ことばの波止場

NINJAL Research Digest

vol. 1  
2017.3



特集

## 国語研では、いま、 何を研究しているのか？

始動する「最先端基幹プロジェクト」

コラム アクセント辞典のひみつ 塩田雄大

研究者紹介 山崎誠・砂川有里子・青井隼人

著書紹介



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構

国立国語研究所

National Institute for Japanese Language and Linguistics

NINJAL

# 日本語研究の 「波止場」としての 国立国語研究所

国立国語研究所長

影山太郎

KAGEYAMA Taro

## 国語研とは？

「国立国語研究所って何をしているの？」、「中学・高校の国語教科書を作る研究所？」——こういった質問を市民のみなさまから受けることがあります。本研究所がどのような研究をしているのか、それが学術的にどのように重要で社会にどう役立つのかといったことを、言語の専門家だけでなく一般社会にも幅広く知っていただくため、従来の専門家向け機関誌『国語研プロジェクトレビュー』を刷新し、一般向けの研究情報誌『国語研 ことばの波止場』を新たに創刊いたしました。

## 日本語研究の波止場

「波止場」という言葉で昭和時代の歌謡曲や映画を思い浮かべる方には、「ことばの波止場」というネーミングはいささかレトロかも知れません。しかし、波止場の意味を「船が停泊する埠頭」という限られた場所だけでなく、埠頭を含む「港」全体を指す（意味論でいうメトニミー）と理解すれば、このネーミングが妙

を得ていることがお分かりいただけるでしょう。生まれも育ちも港町・神戸の私にとって、「港」というと全国及び諸外国の船舶が往来する物産・文化・人の交流点というイメージが強いです。『ことばの波止場』という誌名もそのようなイメージで捉えていただくと、本研究所の役割が理解しやすくなります。

大学共同利用機関は、我が国の学術を先導する研究機関として国内外の大学研究者とともに共同研究を行う機関です。とりわけ国立国語研究所は、日本語に関する研究情報を多方面から収集するとともに、国内外の大学や研究所と連携して共同研究を行い、その研究成果・情報を全国、全世界に向けて発信・提供する役目を担っています。つまり、日本語研究に関する全国的・国際的な港（波止場、中継点）なのです。

## ウチの視点とソトの視点

国立国語研究所は2つの研究軸を持っています。1つは、コミュニケーションの手段としての日本語が持つ社会的・実証的な側面を重視した「ウチ」からの視点による研究です。これには各地の方言や消滅危機言語の研究、大規模に電子化された現代及び過去の日本語資料の研究があります。

もう1つは、人類言語のひとつとしての日本語の普遍的な性質と独自性を重視した「ソト」からの視点による研究です。一般言語学や外国語との対照研究による研究がそれに当

たります。

この2つの研究軸を取り結ぶのが、ウチの視点とソトの視点の交差点に立つ、外国人（非母語話者）の日本語学習・教育に関する研究です。本研究所の強みは、1つの研究所の中でこれら3つの異なる視点を総合した研究を行っていることです。

## 進行中の基幹研究プロジェクト

2016年度から6年間、研究活動の大黒柱となるのは「多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓」という大きな研究テーマです。それを実行するのが表にある6件の大型共同研究プロジェクトです。12は日本語をソトから見る視点、345は日本語をウチから見る視点、そして6はウチとソトの視点の交差する研究です。いずれも、大量の言語データを収集・解析し、コーパスやデータベースといった「言語資源」を提供するとともに、プロジェクトが相互に連携することで新たな研究の地平を開拓していきます。これ以外にも幾つかの共同研究が既に始動しており、本誌で適宜紹介していく予定です。

みなさまのあたたかいご理解とご支援をお願い申し上げます。

## 基幹研究を構成する6つの大型プロジェクト

ソトからの視点	1 対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法
	2 統語・意味解析コーパスの開発と言語研究
ウチからの視点	3 日本の消滅危機言語・方言の記録とドキュメンテーションの作成
	4 通時コーパスの構築と日本語史研究の新展開
ウチとソトの接点	5 大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的な研究
	6 日本語学習者のコミュニケーションの多角的な解明



かげやま たらう ● 国立国語研究所長。専門領域は言語学、形態論、語彙意味論、統語論、言語類型論。関西学院大学文学部教授、日本語研究機関設置準備室長を経て、2009年10月から現職。

# 日本語から 世界の諸言語へ

窪菌晴夫

KUBOZONO Haruo

くぼぞの はるお ●理論・対照研究領域 教授。専門領域は言語学、日本語学、音声学、音韻論 ●危機方言。神戸大学大学院人文学研究科教授を経て、2010年4月から現職。

## 方言とアクセント

日本語は地域（方言）によって単語のアクセント（音の高低）が大きく異なることが知られています。たとえば標準語（東京方言）と鹿児島方言では、基本的な語彙のアクセントがほぼ逆になります。

	東京	鹿児島
雨	<u>あ</u> め	あ <u>め</u>
鈴	<u>あ</u> め	あ <u>め</u>
春	は <u>る</u>	は <u>る</u>
夏	な <u>つ</u>	な <u>つ</u>

このような単語レベルの発音の違いは以前よりよく知られていましたが、文の発音（イントネーション）についてはあまり研究がなされていませんでした。近年になってその研究が徐々に進んできており、たとえば疑問文のイントネーションにも方言差が大きいことが分かってきています。

## 方言のイントネーション

標準語や近畿方言では文の最後をあげて疑問文を作ることが知られています。たとえば東京で「雨」という語を発音すると図1のようになり、

図1 東京の「雨」

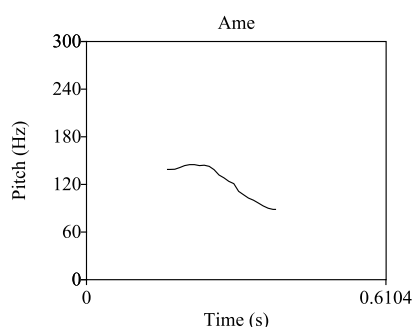


図3 鹿児島の「雨」

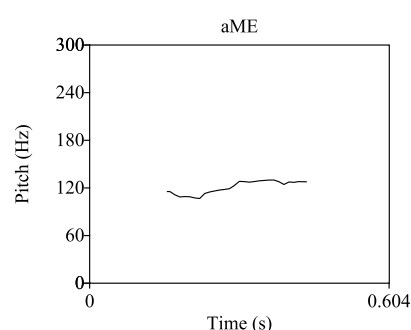


図2 東京の「雨？」

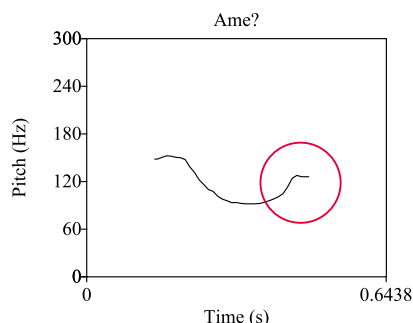
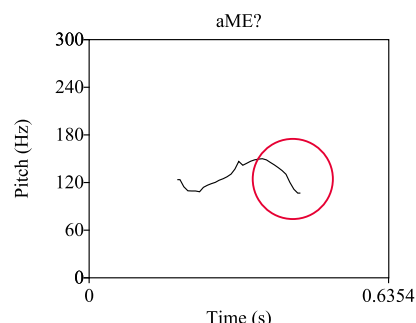


図4 鹿児島の「雨？」



それを「雨？」という疑問文にすると図2のように文末が上がります（赤丸）。

一方、鹿児島方言はこれとはまったく逆で、文末を下げて疑問を表します。「雨」だけだと図3のように語末（文末）は比較的高く発音されるのですが、疑問文として「雨？」と聞くと、図4のように文末が下がって発音されます。これは「雨」に限らず、すべての語にあてはまります。この方言では文の最後を積極的に下げることによって疑問の意味が表されるのです。

## 日本語から世界の諸言語へ

日本語だけを見てもこのような地域差が見られますので、研究対象を世界の諸言語に広げると、さらに大きな違いが観察されることが予想されます。

「対照言語学」プロジェクトでは、このように日本語を内からと外からの両方から見ることによって、日本語の特性と多様性を明らかにすることを目指しています。研究対象は上記のような音声だけでなく、文法や意味にまで及びます。

# 日本語の構造と 意味が分かる コーパス

プラシャント・パルデシ

Prashant PARDESHI

プラシャント・パルデシ●理論・対照研究領域 教授。専門領域は言語学、言語類型論、対照言語学。神戸大学大学院人文学研究科講師、人間文化研究機構国立国語研究所准教授を経て、2011年4月から現職。

## 言葉の流れを構造に

言葉を文字で書き表わそうとすると、文字が一直線に並ぶだけです。ところが実際には、言語は直線ではなく階層的な構造を作っているというのが言語学の常識です。たとえば、「私が読む」は文字では4文字が並んでいます。しかし、「私」は「が」と、「読む」は「む」とくっついて、「私が」と「読む」という2つのまとまりを作っています。さらにその後ろに「本」をつけて「私が読む本」とすると、「私が読む」という全体に「本」がくっついていることが分かります。このような仕組みを「構造」といいます。構造の理解は人間の頭の中では無意識に行われるのですが、コンピュータにそれをさせることは至難の業です。

## 統語・意味解析コーパス

コーパスとは書かれた文章や話された言葉を大量かつ体系的に収集し、電子化により様々な検索ができるようにしたものです。今まで色々なコーパスが作られてきましたが、ことばの流れを直線的に捉えるだけで、構造を組み立てることはできませんでした。

もし構造の組み立てまで可能なコーパスができれば、大げさに言う

と、人間の脳における言語処理に一步近づくわけで、それにより、将来的には自動翻訳や人工知能の開発にも役立つはずですが、

私のプロジェクトが取り組んでいるのは、主語や目的語の関係や、「魚が焼けるにおい」(名詞修飾)、「花子はバッグを盗まれた」(受身)、「子どもに本を読ませる」(使役)などの文構造をたちどころに表示してくれるような、高度な分析力と詳細な統語・意味情報を提供できるようなコーパスです。この種のコーパスは、日本語についても多くの諸外国語についても、まだ完成していません。このようなコーパスができれば、日本語の言語学的な分析が進むだけでなく、国語の勉強や、外国人の日本語学習にも貢献できるはずですが、

## コーパスの構築と公開

このようなコーパスを構築するためには、言語学の専門的知識とコンピュータによる言語処理技術が不可欠ですが、それだけでなく、外国語について同様のコーパスを開発中の海外研究機関との協力関係が重要です。そのため、欧米の大学とも連携しながら研究を進めています。

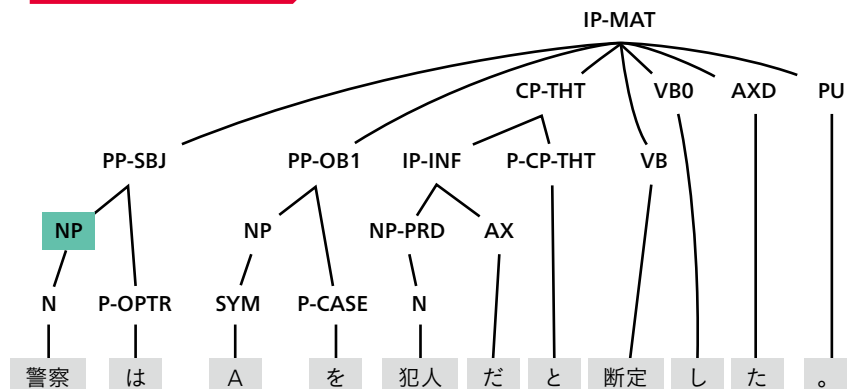
完成は何年か先になりますが、できた部分から公開しています。

「統語・意味解析コーパスの開発と言語研究」

<http://npcmj.ninjal.ac.jp/>

特別なコンピュータ操作を必要としないインターフェイスを提供しています。是非、試してみてください。

## 文構造の解析結果



# 言語・方言が 消えていく

木部 暢子

KIBE Nobuko



きべのぶこ ● 言語変異研究領域 教授。専門領域は日本語学、方言学、音声学、音韻論。鹿児島大学法文学部教授を経て、2010年4月から現職。

## 言語・方言が消えていく

2009年、ユネスコ（国連教育科学文化機関）は世界に6,000から7,000ある言語のうち約2,500が消滅の危機にひんしていると発表しました。この中には、日本で話されている8つのことば—アイヌ語、八丈語、奄美語、国頭語、沖縄語、宮古語、八重山語、与那国語—が含まれています。

しかし、消滅の危機にひんしているのは、これだけではありません。日本各地の方言もまた、消滅の危機にあります。消滅してしまう前にこれらを録音し、その特徴を分析して、記録を残しておこう、さらに、方言を次の世代に伝える活動を地域の人たちといっしょに行おうというのがこの研究の目的です。

## 方言はなくなった方がいい？

消えつつある方言を記録し、次の世代へ伝える意義はどこにあるのでしょうか。中には、方言でしゃべっても通じないから、方言はなくなった方がいいという方もいらっしゃると思います。しかし、そもそもなぜ方言はこれほど多様になったのでしょうか。おそらく地域の自然や生活、文化の中で、人々はいろいろなことをどう表現するかを考え、もっ

とも適した表現を選んでいった。その結果が方言の多様性なのではないかと思います。

## 方言から学ぶ

各地には方言でしか言い表せない事柄がたくさんあります。例えば、沖縄本島の西原地区には、「ティーダ ネーラスン」（太陽を萎えさせる）という表現があります。夏の暑い日に、「マフックァー アチサクトゥ ティーダ ネーラチカラ ハルカイイケー」（真夏の日中は暑いので、太陽を萎えさせてから畑に行きなさい）と言います。<sup>\*</sup>「太陽を萎えさせる」とはよく言ったものですが、ここには「ティーダ」（太陽）に対する恨みの

気持ちは少しもありません。あるのは、太陽の力が少し弱まるまで、といった畏敬の念や、まるで友人をなだめるかのような親しみの気持ちです。「とても暑い」では言い表せない、「ティーダ」と沖縄の人たちとの関係が「ティーダ ネーラスン」には込められているのです。

ことばは、人間がこの世界をどう考え方、どう感じているかを考える入り口です。方言から学ぶことは多いのです。

<sup>\*</sup> 狩俣繁久「琉球方言から考える言語多様性と文化多様性の危機」NINJALフォーラムシリーズ第3回『日本の方言の多様性を守るために』

## 消えつつある日本の方言



# コーパスで 日本語の 歴史を探る

小木曾智信

OGISO Toshinobu

## 言葉の歴史を探るには

日本語は現在まで千数百年の歴史をたどることができる、世界でも数少ない言語の一つです。言語変化研究領域では、日本語がこの長い歴史の中でどのように変化してきたかを研究しています。

古い時代の日本語を研究するには、残された文献を手がかりにするほかありません。文献から実際に使われた用例を集めて、当時その言葉がどのような意味で使われていたのかを実証的に明らかにしていきます。そのために、従来は紙の本の資料が使われてきたのですが、それでは調査できることに限界がありました。



日本語歴史コーパス

## 『日本語歴史コーパス』

そこで、言語変化研究領域の「通時コーパス」プロジェクトでは、古典作品など日本語の歴史を研究するのに役立つ文献をコンピューター上で扱えるようにし、本文の全ての単語に読みや品詞などの情報を付けた『日本語歴史コーパス』を構築しています。これまでに平安時代、鎌倉時代、室町時代、明治・大正時代の資料をコーパス化してきました。

## 「かわいい」と「うつくしい」

これを使うと、例えば「うつくしい」とか「かわいい」という言葉がいつ頃からどんな資料で使われているのか。また、それらはどんな場面でどんな言葉と一緒に使われるのか、といったことをたちどころに調べることができます。公開中のコーパスで実際に調べてみると、「うつくしい」は平安時代に270例、鎌倉時代に19例、室町時代に36例、明治・大正に1397例見つかりました（※一部コーパスの仕様により別の語の例が含まれています）。一方、「かわいい」は平安時代にはなく、鎌倉時代に3例、室町時代に18例、明治・大正に402例ありま

した。「かわいい」のほうが後から使われるようになった言葉で、全時代を通じて「うつくしい」のほうが多く使われてきたことが分かります。一緒に使われている言葉を確認すると、平安時代には「稚児」「子ども」などを「うつくしい」といっていて、鎌倉時代になってから「妻」「女房」を「うつくしい」という例が見られます。この間に〈かわいらしい〉という意味から現代語の〈美しい〉の意味に変化したようです。コーパスの各用例からは原文や現代語訳にリンクがはられているので、これを使って個々の用例を調べることもできます。「かわいい」の用例を確認すると、鎌倉時代の例はいずれも〈かわいそう〉の意味、室町時代の例は〈いとしい〉といった意味のものでした。

## 新しい日本語史研究へ

このようにコーパスによって用例の収集がずいぶん楽になりましたが、それだけでなく、コンピューターで大量のデータを統計的に処理する新しい方法による研究も可能になりました。「通時コーパス」プロジェクトでは、上代から近現代まで、日本語の歴史を通して調べることのできるコーパスを構築し、これを活用した新しい日本語の歴史研究を進めていきます。



おぎぞ としのぶ ●言語変化研究領域 准教授。専門領域は日本語学、自然言語処理。明海大学講師、独立行政法人国立国語研究所研究員を経て2009年10月から現職。

# 日常会話 における 日本語の姿

小磯花絵

KOISO Hanae

## 話し言葉を「見つめる」

私は仕事柄、自分が話している言葉を録音して聞いたり、話したものを文字にして読むことがよくあります。「自分はこう話しているだろう」というイメージとは異なり、くだけた表現や言いよどみが実に多く、とても驚かされます。例えば、「来られる」が「来れる」となる、いわゆる「ら抜き言葉」。私も会話でよく使ってしまう。文化庁が平成12年に、普段どちらを言うか調査したところ、6割の人が「来られる」を用いると回答しました。しかし同時期に話された会話データを調べてみると、7割が「来れる」、つまり「ら抜き言葉」でした。

書き言葉では、自分の書いた文章を目で見えて推敲することができますし、規範的な意識もより働くでしょう。しかし話し言葉は、言ったそばから消えて無くなるため、自分がどのような言葉づかいをしているかを見つめる機会はほとんどありません。

## 日常会話コーパス

そこで「日常会話コーパス」プロジェクトでは、日常生活の中で実際に交わされる会話を大量に録音し、話している内容を文字にした上で、品詞などの情報を付けたデータベ

ス（ことばの研究の分野では「コーパス」と呼びます）を作り、私たちの日常の言葉の性質や仕組みを調べています。

## どんな種類の会話をしている？

日常会話といっても、家族との食事の雑談もあれば、仕事仲間との業務の相談や帰宅時の雑談など、さまざまな場面や人との会話があります。おそらく使われる言葉も少しずつ異なるでしょう。こうした違いを詳しく調べるには、コーパスに多様な会話をバランスよく含めることが大切です。そこでコーパスを作る前に、私たちが普段どのような種類の会話を行っているかを調査しました。結果、家族・友達・仕事仲間との食事・家事・工作中的会話に加え、店舗での店員とのやりとりや、通勤通

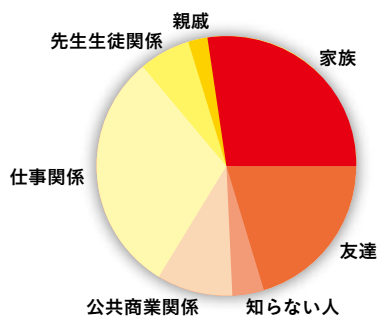
学時などの会話も多く見られることが分かりました（グラフ参照）。

調査を参考に多様な会話を納めたコーパスが完成すれば、場面や相手によっていかに言葉を使い分けているか、年齢の違いでどのように言葉づかいが異なるかを調べることができるようになります。例えば先に見た「ら抜き言葉」。年配の人の使用は5割なのに対し、若者は8割と、若者ほど多く用いていることが分かります。

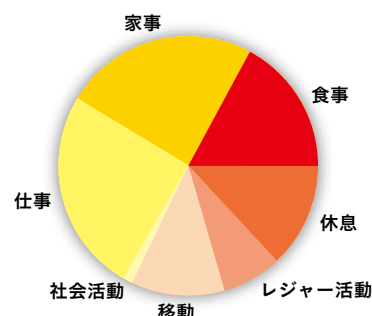
プロジェクトではこのほか、1960年前後に収録された話し言葉のコーパスも作成し、話し言葉の変化も調査します。例えばら抜き言葉の使用がこの50年余りでどのように変化したのか、こうしたことを調べることができるようになります。

## ふだんの会話は？

どのような関係の人と会話をする？



何をしながら会話をする？



# 外国人の 生み出す 日本語の研究

石黒圭

ISHIGURO Kei

いしぐろ けい ● 日本語教育研究領域 教授。専門領域は日本語学、日本語教育学。一橋大学国際教育センター・言語社会研究科教授、人間文化研究機構国立国語研究所准教授を経て、2015年12月から現職。

## 日本人の知らない日本語

日本語について書かれた本のベストセラーに『日本人の知らない日本語』があります。日本語学校で外国人に日本語を教える日本語教師「なぎこ先生」の奮闘を描いたコミックエッセイです。この本がベストセラーになった当時、多くの日本語教師はびっくりしました。そこには、日本語教師にとって、あまりにも当たり前の内容が書かれていたからです。

この本には、たとえば、ヘビを「1本」を数える中国人留学生が出てきます。細くて長いものを「1本」と数えることを「なぎこ先生」に教わったからです。ヘビは生き物なので「1匹」と数えるわけですが、中国語では川もヘビも同じ「条」で数えます。

こんな光景は、私たち日本語教師がよく見かけるものですが、一般の日本人には目から鱗なのかもしれません。日本語という言語の性格は、日本人の目からは見えにくく、日本語を学ぶ外国人の目とおして初めてよく見えてくるのです。

国立国語研究所の日本語教育研究領域では、学習者コーパスというものを構築中です。学習者コーパスは、外国語として日本語を勉強している人が話したり書いたりしたものを集めたデータベースです。まさに「日

本人の知らない日本語」の宝庫です。

## 日本語の難しい発音と文法

たとえば、世界各国の日本語学習者の言葉を集めた「I-JAS 多言語母語の日本語学習者横断コーパス」を見てみましょう。

私のなかでは「病院（びょういん）」という発音が留学生に難しい印象があります。「美容院（びよういん）」と似ているからです。I-JASで調べてみると、予想どおり、病院を「びよういん」と言ってしまうトルコ人が見つかりました。そのほか、「びょうひん」と言ってしまうフランス人、「びょいん」「びょうえん」と言ってしまう韓国人、「びょいん」と言ってしまうタイ人、「じょういん」と言ってしまうオーストラリア人などがいることがわかりました。万国で「病院」の発音と戦っている学習者がいるわけです。

発音だけでなく、文法も日本語学習者にとって難しいものです。学習者の頭のなかでは「だと思ふ」がセットになっているため、何にでも「だと思ふ」をつけてしまいます。ドイツ人「いいだと思ふ」、ベトナム人「なりたいたと思ふ」、韓国人「忙しいだと思ふ」、トルコ人「難しいだと思ふ」、スペイン人「おいしいだと思ふ」、ハンガリー人「美しいだと思

う」、インドネシア人「悪いだと思ふ」など、枚挙に暇がありません。

発音でも、文法でも、学習者が共通して苦手とする部分は誤用として現れます。この誤用こそが日本語教育のキモなのです。

## 広がる学習者コーパスの和

日本語教育研究領域では、この「I-JAS」のほか、学習者と母語話者の会話を集めた「BTSJ 日本語会話コーパス」、学習者の母語による文章理解を示した「日本語非母語話者の読解コーパス」、学習者が教室で学ぼう様子を文字化した「教室談話コーパス」など、多様なコーパスを整備し、外国人の生み出す日本語を研究することで、日本語教育の現場に役立つ知見を提供することを目指しています。



日本語の習得研究ウェブサイト



## 方言の 記録と継承による 地域文化の再構築

1995年の阪神・淡路大震災、2011年の東日本大震災、2016年の熊本地震と、私たちはこの20年間に大きな地震を3度経験しました。台風による被害や大雨による被害もたくさん起きています。災害もさることながら、地域が抱えるもっと大きな問題は、人口の減少による地域の疲弊です。このような地域の問題に対して、言語の研究はどう向き合えばいいのでしょうか。

鹿児島県喜界島  
のみなさんと



私たちが行っているのは、ことばを通して地域を元気にしようという試みです。地域の人々はみな、方言を誇りに思っています。そのような人たちと一緒に方言辞典を作ったり、録音をとったり、子どもたちに方言を教えたりして、地域文化の価値を再確認しています。

(木部 暢子/言語変異研究領域 教授)

## 表記情報と 書誌形態情報を加えた 日本語歴史コーパスの 精緻化

書物には、書かれている内容のほか、書物の作り方、書物の大きさ、使われている紙、書かれている文字などにそれぞれ意味があります。そして、それらから様々な情報を読み取ることができます。

本プロジェクトは、書物をキーワードに、文学（国文学研究資料館）、歴史（国立歴史民俗資料館）、文化（国際日本文化研究センター）、言語・文字の多方面から研究者が参加し、「総合書物学」という新たな研究分野の構築をめざしています。

国立国語研究所では、言語・文字から見た書物という観点で、研究を進めています。具体的には言語単位（単語、文節、句、文など）と表記・書記単位（仮名字体、漢字字体、連綿文字列、句読点など）の情報を、日本語歴史コーパスに加えます。そして、書物と言語・文字との歴史的な関わりについて、データに基づく研究を展開します。

(高田 智和/言語変化研究領域 准教授)

## 北米における 日本関連在外資料 調査研究・活用

言語生活史研究に基づいた  
近現代の在外資料論の構築

19世紀終わりからハワイを始めとする南北アメリカに渡った人たちが日本から持ち出した資料、現地の生活で生み出された資料がたくさんあります。その多くは未整理のままです。特に日本語で作成された資料や歴史記述

のために収集された録音資料や映像資料の多くは、何もなされていないまま保管されています。

本プロジェクトは、それらの未整理の資料を発掘し、デジタル変換を施した上で保管、整備し、それを研究するとともに博物館での企画展示を行うことを目的としています。

資料と一言でいってもその量は膨大なものなので、現地の日系史ではあまり取り上げられなかったテーマ（労働運動、MIS、写真花嫁など）に関連する資料を言語学、歴史学、女性学、民俗学の研究者とともに研究しています。

(朝日 祥之/言語変異研究領域 准教授)

# アクセント辞典の ひみつ



NHK 放送文化研究所  
主任研究員

塩田雄大

SHIODA Takehiro

え:うちべけい

舟尾亜夢  
ふね お あ む

アク魔博士

## 「熱くなったときも。」



なにこのCM。「熱くなったときも」って字幕出したときには最初の「ア」を高く言ってんのにさー、そのあとの「暑くなったときも」だと「ア」を低くして「ツ」からは高く発音してる。これだと「厚くなった」っていうことになるんじゃないの？



そりゃ某コーラ飲料のCMじゃな。わしも最近、気になっとるんじゃ。



おじさん、だれ？



わしはのう、アクセントを研究しておる「アク魔博士」じゃ。

## マスコミのこぼとアクセント



アクセントなんか研究して、誰が得すんの。そんなのは趣味でやるもんじゃじゃないの。



そういうのを「アク趣味」と言うんじやが、まあ聞きなさい。アクセントというのは、もともと、どれが正しいとか、どれが間違っているといったことはないんじや。しかし、テレビのように多くの人が視聴するような場合には、こういうアクセントやこういう発音はちょっと…、と感ぜられてしまうものがよくある。今のCMじやと



「熱い」と「暑い」のアクセントを言い分けておったが、そんな区別はあまり一般的ではないな。CMの内容よりも、アクセントのほうに気になってしまう。情報伝達に悪い影響を及ぼしてしまっているわけじゃ。こういうのを「アク影響」と言う。



ズコーツ！

## 放送用語は「蒸留水」



わしらの仕事はのう、「放送で聞いたときに引っかけられない、「蒸留水」のようなことばのスタイル」を提案することなんじや。知っておるか？「蒸留水」というのは、そのまま飲んでも決してうまいものではない。しかし、安全なんじや。だけど「ミネラルウォーター」は、味はうまいが、これで粉ミルクを作るのはあまりよくない。それぞれの役割がある。ことばも同じことじゃ。



なんだか前置きが長いね。



情報伝達で一番大事なのは、「内容が正確に伝わること」。そのために必要なのが、ことばの「蒸留水」なんじや。

時代とともにことばは変わる。そして、その規範意識も変わる。時代に合わせたチューニングが必要じゃ。そこで、これまでのアクセント辞典をもとに、8年かけてできあがったのが、この『NHK日本語発音アクセント新辞典』。



ずいぶん長い名前だね。アクセントの本だから、「アク書」って呼んだらどう？




それも名案じゃが、わしは「Shin Ji-Ten」だから『SJT』と呼んでおる。わしだけだかな。

## 「正しいアクセント」は、ある？





その「USJ」っていうのを見ると、正しいアクセントがわかるってわけね。

 違う、『SJT』じゃ。あとな、「正しいアクセント」を載せているわけではない。「アクセントはいろいろあるが、少なくともここに記したものであれば、アクセントが気になって全体の内容が頭に入っていないという人は、まずいない」という「おすすめのアクセント」を示してあるんじゃない。断っておくが、ここに載っていないアクセントは「日本語として間違っている」などというつもりは、毛頭ないぞ。



## 「熱い・暑い・厚い」のアクセント

 じゃあ、「熱い・暑い・厚い」のアクセントはどうなってるの。

 ほれ、見てみなさい。「 $\backslash$ 」は音の「下がり目」、「 $\bar{\quad}$ 」は「下がり目なし」を表しておる。「熱い」と「暑い」はまったく同じアクセントで、「アツ $\backslash$ イ」のように「ツ」の後ろで音が下がる。それが活用して「熱く・暑く」となると、下がり目が一つ前に移動して、「ア $\backslash$ ツク」のように「ア」の後ろで音が下がるんじゃない。それに対して、「厚い」「厚く」は音が急に下がるところがない。「アツイ $\bar{\quad}$ 」「アツク $\bar{\quad}$ 」じゃ。

あつい【厚い】【あつい(×篇)】
アツイ $\bar{\quad}$
アツイ $\bar{\quad}$ 、アツ $\backslash$ カッタ、アツク $\bar{\quad}$ 、
アツ $\backslash$ クナ、アツ $\backslash$ ケレバ
あつい【暑い】【熱い】アツ $\backslash$ イ
アおあつい
★アツ $\backslash$ イ、ア $\backslash$ ツカッタ、ア $\backslash$ ツク、
ア $\backslash$ ツクナ、ア $\backslash$ ツケレバ

つまり、こうなる。

「熱く(暑く)なったときも」


ア $\backslash$ ツク・ナ $\backslash$ ツタ・ト $\backslash$ キモ


「厚くなったときも」

アツクナ $\backslash$ ツタ・ト $\backslash$ キモ


『NHK日本語発音アクセント新辞典』p.25


## 地名のアクセント

 なつとくー。あ、「厚い」のページをめくると、「厚別 アツ $\backslash$ ベツ」っていう北海道の地名が載ってるね。「地元放送局では「ア $\backslash$ ツベツ」も使う」って書いてあるけど、これどういう意味?

 これはのう、全国の放送局では「アツ $\backslash$ ベツ」と言うことが多いが、地元北海道の放送局では「ア $\backslash$ ツベツ」で放送しているということなんじゃ。これは「地元の方言」ではないぞ。要注意じゃ。


## どうやって決める?


 そういう、いろんな放送局のこととか、変化するアクセントのこととかって、どうやって決めてんの。ノリで決めたりとか?


 ことばの基準を、少人数で名人芸的に決める時代は、もう過ぎたんじゃ。今回、何百人ものアナウンサーに尋ねて、結果をもとに徹底的に議論した。この熟議を通して選び抜かれた“蒸留水”を示したのじゃ。


ことばは、個人によっても違うし、地域によっても、年代によっても違う。みんな違ってみんないい。しかしな、いろんな人が“公的な広場”、たとえば放送などな、ここで話をするときには、情報の内容以外のことで気になったり、引っかかったりするような要素は、できるだけ少ないほうがよいのじゃ。というか、少ないほうがよいと考える人には、この『SJT』を参考にしてもらいたい。

## 新しいことばもたくさん

 新しく載せたことばもあるんでしょ。

 これまで載っていなかった新語や地名、四字漢語などを4千4百語ぐらい追加して、本編部分だけで約7万5千語になったんじゃ。それ以外に、巻末には「ブド $\backslash$ ーパン、メロ $\backslash$ ンパン」「アンパ $\backslash$ ン」という複合名詞を後部要素「～パン」でまとめた資料や、「月：ニガツ $\backslash$ 、サ $\backslash$ ンガツ」「億：ニ $\backslash$ オク、サ $\backslash$ ンオク」などのような数詞と助数詞のページもあるぞ。

 だけどこの辞典、1kgぐらいあって重たいね。

 そうじゃ。毎日引くと筋肉がつくぞ。健康にもいい辞典じゃ。

 ぎゃふん。



カット：しおだきよら

しおだ たけひろ ●NHK大阪放送局勤務を経て、1997年から現職。放送で用いる日本語の方針立案・策定に関連する言語調査・研究を担当、『NHK日本語発音アクセント辞典』改訂(1998年版・2016年版)に従事。著書に『現代日本語史における放送用語の形成の研究』(三省堂2014年)。



## 研究者紹介 001

# 山崎 誠

言語変化研究領域 教授

日本語全体にわたって、  
今の時代の一般的な姿はこうである  
というような基準とか規範になるような  
ものを作りたい

やまざきまこと ● 1957年茨城県出身。国立国語研究所には1984年から在籍。日本の「ことば」と「ことばの研究」を30年以上にわたり研究員として観察しつづけてきた。国語研が実施してきた語彙調査を源とする計量語彙論の新しい展開に取り組む。

### — 語彙に関する研究を大学時代から行ってきた、とのことですが。

今はコーパス（文章を大規模に集めてデータベース化したもの）がありますが、昔は文献を片っ端から見ていくことをしていました。ある時代の文献と別の時代の文献の語彙を「形が変わる」「意味が変わる」という点を中心に見るんです。

対象が同じだけど、指し示す語が変わるといってもあります。今頼のことを「ほお」と言いますが、昔は「つら」とも言ったんです。「頼杖」も「つらづえ」って言ったんですね。なぜそうなったのか、というようなことに興味がありました。

### — 語彙に関する研究をなさっていて、どういうところが面白いですか。

以前、国語研で「分類語彙表」を作るプロジェクトに参加していました。語を意味別に分けて番号を振る作業なのですが、分野によっては、所属する語がたくさんあったり、なかったりします。1964年に初版が出て、2004年の増補改訂が出たんですが、2つを比べると、劇的に変わっているところとそうでないところがあります。事物とか、具体的なモノは相当な変化があり、抽象的な概念はほとんど変わっていません。もっとさかのぼれば、抽象的な概念も変わってくると思いますが。

分類語彙表は日本語全体を見渡すことができるので、全体像が見えて、しかも歴史的な変化があることがわかります。ひとつ気づいた例をあげると、語彙表に「税」という項目があるのですが、課税とか納税とか、ほとんどが漢語なんです。「税金」という言葉も漢語

なんです。和語で税金を表す語がない。昔に遡っても、租庸調とか年貢とか税金に関する言葉はほとんど漢語で、和語は「貢ぎ（もの）」だけなんです。動詞だと「払う」とか「納める」というのがあるんですが、税金自体が、海外から輸入された概念だということがわかるんです。

### — 現在、国語研究所ではどのようなお仕事を。

国語研究所では6年単位でプロジェクトを進めていて、ちょうど今年度から変わったんですね。今取り組んでいるのは「通時コーパス」「日常会話コーパス」の作成、もう一つはコーパス開発センターという部署で「語彙資源（分類語彙表やUniDic）」の整備を行っています。

### — 研究に対して「社会への還元」が問われていますね。

学界だけでなく、社会への還元も非常に重要です。例えば、「日常会話コーパス」のプロジェクトを進めているのですが、現時点では「ふつうの人のふつうの話し言葉」がちゃんと記録されたデータが少ないです。それをちゃんとコーパス化しなくてはなりません。

状況とか自分の置かれた役割やテーマで、かなり使われる言葉が変わってきます。これを使うと、こういうふうな話ぶりになるとか、そういったキーワードがわかれば、例えば学会の講演とかの時は、こういう言葉は使わないとか、ふつうの会話ではむしろこっちを使うとかがわかるはずですよ。

留学生の方なんかは、間違っって使うと不自然になってしまいますね。状況

にあった言葉遣いをするために、適切な言葉を選ぶ、言葉だけでなく構文や語順も含むのですが、相手への働きかけも含め、どういうものが適切であるかが、コーパスが構築されれば明らかになります。

### — 最後に、今後やりたいことを。

データを作って公開をしているのですが、分類語彙表のような語彙リストは、なんらかの形で、ちょっとオフィシャルなものがないかと考えています。漢字は文部科学省が常用漢字表を作っていますよね。語に関してはそういうものがない。日本語教育では、級別のリストがありますが、母語話者についてのグレードを示したものはありません。

また、分類語彙表は意味の情報しかないの、使用頻度や表記バリエーションなど語に関するさまざまな情報を総合的に展開、維持できるようなものにする、将来的には日本語の姿を語を通してまとめることができるのではないかと考えています。

### 話し言葉における品詞の分布（短単位）

品詞	日本語話し言葉コーパス		名大会話コーパス	小説会話(BCCWJ)
	学会講演	模擬講演		
名詞	25.77	19.86	17.18	22.45
代名詞	1.74	2.35	4.22	3.78
形容詞	0.98	1.79	3.13	2.1
形状詞	1.74	1.6	1.1	1.14
動詞	13.13	13.27	11.53	14.19
副詞	2.08	3.85	5.08	2.95
連体詞	1.41	1.13	1.3	1.31
接続詞	1.22	1.05	0.59	0.33
感動詞	6.91	5.7	7.95	0.93
助詞	29.11	32.23	33.02	33.73
助動詞	10.84	12.79	12.59	13.59
その他	5.06	4.39	2.32	3.5



## 研究者紹介 002

# 砂川有里子

客員教授・筑波大学 名誉教授

## 自分の興味の赴くままに～ 研究が面白くて 仕方がない

すなかわゆりこ ● 1949年東京都出身。日本語教師・日本語学習者の必携辞典『日本語文型辞典』の編集をはじめとする日本語教育への大きな貢献が評価され、日本語教育学会賞を受賞(2012年)。言語研究の専門書『文法と談話の接点』も高い評価を受けている。

### — 日本語教育や日本語研究に関心を持ったきっかけを教えてください。

大学卒業後、ニュージーランドに1年いたのですが、生活費を稼ぐために中学高校で日本語を教えていました。飛び込みでお願いしたんです。教えるとすぐに「私に向いているかも」と思いました。

帰国後カルチャーセンターで外国人に日本語を教えることになりました。当時は文法シラバス全盛だったわけですが、教えてみると、いくら調べてもわからないことが、たくさんたまってきます。「どんな文法書を見ても載っていないということは、もしかしてあんまり研究されていないんじゃないか」とすごく不遜な勘違いをして(笑)。

そのころに、(日本語教育で参照できる文法を解明しようとされていた)故・寺村秀夫先生に心酔してしまい、仕事をやめて大阪外国語大(現大阪大)の大学院に入りました。日本語の参考書とかは何にもない時代でした。文法書はあったけれど、日本語教育の現場ですぐに役立つというものは、なかなか参照できなかったんです。

### — 寺村先生からは、どんな影響を。

日本語教育からの日本語研究は、なんの形もないような状態からはじまったので、とにかく手探りで自分で調べ、考え、やってみるしかありませんでした。寺村先生がそういう意味では第一人者で大きな感化を受けました。寺村先生は(特定の言語理論に則って文法を考える)生成文法をきちんと勉強した方ではありますが、それとは違う(実際の使用から文法を考える)記述文法を徹底して追求されている方でした。

私の場合は、寺村先生に感化されつつも、それとは違う研究のスタイル、つまり、自分の興味の赴くままに、地を這うように。どこいっちゃうかわからないような研究スタイルが身についたんです。

### — どんどこころに研究の面白さを感じますか。

最初は文レベルのことばの整合性を探求することに面白さを感じました。ですが、そのうちにそれでは解決がつかない問題に気付きました。例えば談話(文のまとまり)においては、気持ちや雰囲気によって自由気ままに話が展開しているようにみえても、一定のルールの中でことばが運用されています。そういう場合の整合性は文レベルでの整合性とは違うということで、文法とは違った談話の面白さを感じられてきました。日本語教育を頭の片隅においていると、ことばの運用ができなければコミュニケーションできないわけだから、文法だけを考えていても仕方ないですね。ただ、談話のことを考えるときも、文法が談話の中でどんな働きをするかという観点から見て、そういう点では文法から大きく離れていません。

### — 文法から談話へと興味が移られていったんですね。近年ではコーパスにも関わっている印象があります。

『日本語文型辞典』を作ったんですが、90年代にはまだ国語辞典でも外国人向けの参考書でもいわゆる機能語(単独では意味を持たない語。助詞など)とよばれるものが調べられなくて、それなら自分たちで作っちゃえ、という感じで仲間を募って用例集めをして

見出し語を決めたんですね。後になって、そのときにコーパスがあったらどんなによかったかなって思いました。

そのあと、コーパスについて何も知らないのに、BCCWJ(現代日本語書き言葉均衡コーパス)を構築するプロジェクトチームへのお誘いを引き受けたのは、そのときの思いがあったからだと思います。昔も今もコーパスに関してはわからないことが多いのですが、「初心者でもこのぐらいまでできますよ」「教育にも役に立ちますよ」ということを紹介していきたいです。

### — 現在の国語研との関わりは。

迫田久美子先生が作られた学習者コーパスの構築を少し手伝ったんですが、このコーパスをどう応用できるか考えるのが私の役目かなと思っています。自分が面白いと思った現象を、一人で調べたり誰かと一緒に調べたりして、私自身がとても勉強になります。あと、もう一つ。プラシャント先生の基本動詞ハンドブックづくりにも関わっています。多義動詞の意味の記述方法について考えたりしています。

### — 最近では共同での研究も目立ちます。

プロジェクトに関わると、いろんな人と関われるのが楽しくて。長年ずっと一人で文法を研究するという研究スタイルでした。BCCWJに関わってからチームで研究することが、いろんなエネルギーを生むものだということが気がつきました。

### — 今は研究することが楽しくて楽しくてしょうがない、という感じですね。

はい。その通りです(笑)。



### 研究者紹介 003

## 青井隼人

外来研究員・日本学術振興会 特別研究員(PD)

ことばは  
人間が思っているより  
よっぽど面白くて複雑だ

**あおいはやと** ●1987年岡山県出身。「ことばには世界を変える力がある」という中学校教師の言葉をきっかけにことばに関心を持つように。東京外国語大学大学院を経て、現在は、日本学術振興会の特別研究員。2012年の日本音声学会で優秀発表賞を受賞するなど、若手のホープとして期待されている。

— 現在の研究の中心は、沖縄県宮古列島の「多良間方言」ということですが、フィールドワーク（現地調査）を中心になさっているそうですね。現地に溶け込むのは大変でしたか。

はい。はじめはすごく緊張しました。大学院1年目の夏休みに行ったんですが、行く前の3ヶ月くらいは図書館に行って方言辞典を探して、多良間方言ではなんと言うのか勉強したりとかという準備をしました。あと、荷物を必要以上にたくさん持って行ったりして。

最初に基礎語彙調査をやるんですけど、村役場の方におじいさんを紹介してもらって、その方に毎晩20語聞いていくつもりでした。ところが途中でかなり巨大な台風が来て、3日くらい外に出られなくなりました。さあ台風が終わって調査をするぞ、と思ったら、今度は「台風で作業ができなかったので、何日かは畑仕事をさせてほしい」と言われて、そして1週間ぐらいたって「今日こそは」とと思ったら「もうこれ以上は協力できない」と言われてしまっ。ですから、最初の調査は、結局50語くらい集めただけで終わってしまいました。滞在期間が2～3週間ぐらい残っているし、どうしようかと。それで、別の方を紹介してもらうことになり、そこからは別の調査に切り替えて、なるべく多くの人から母音の発音のデータを採らせてもらうことにしました。フィールドワークというのは、実際に行ってみてわかることも多いので、調査も臨機応変に対応するようにしています。

— 実際に行った調査の中で印象に残っていることを教えてください。

「パラトグラフィー」という調査の方法をご存知ですか？粉末状の竹墨を食用油で溶いた墨を、ペロ（舌）に塗ってその状態で発音してもらいます。その状態で発音すると、ペロが接した上顎のところに墨が付着します。その上顎に残った墨あとを写真にとって、そこから、どういう発音になっているか、どんな特徴をもっているかを調べるんです。

最初に依頼した方が、入れ歯でがんばってくださいなんですが、墨がうまく塗れない。写真をとるときに鏡を挿入するんですが、口がうまく開けられない。入れ歯の方はこの調査には不向きなんだなとわかりました。ただ、その方が「自分が入れ歯のせいで調査がうまくいかなかった」とすごく気にされて、代わりに話者を探してきてくださいました。調査を諦めかけていたときだったので、ものすごく喜んだのと同時に、ありがたく思いました。

— そういったなかで発見があったと。

現地調査に行って、予想していなかったデータを得られたときはとても

楽しく感じます。この調査では、多良間方言の特徴的な舌先母音（標準語の発音とは少し異なる母音）が口の中でどういうペロの構えで発音しているのか、いままでわからなかったことを解明できたことは、とても嬉しいことでした。

アクセントの調査をするときには、こういう語彙を使って、こういう文を使ってやると、だいたいこういう結論が出るだろうな、という予想を立てるのですが、それと全く違うようなものが調査で出てくることがあって、そういうことが面白いと思うわけです。

— 今後、「こういう研究をしてみたい」、「こういう方向に発展させたい」などありますか。

国語研の「危機方言に関するプロジェクト」にも参加していて、これに関連することなのですが、今考えていることの1つは、危機方言とよばれる多良間方言について音声だけでなく、文法も取り扱いたいと思っています。文法的な仕組みを深く理解することによって、まだ十分に解明されていない音声的な仕組みの詳細が見えてくるのではないかと期待しています。



パラトグラフィー調査中の1コマ。話者の口内に墨を手早く塗る。

# Book Review

著書紹介

## 『色葉字類抄』の研究

藤本灯

勉誠出版  
2016年3月



**国**語資料研究において、諸本研究と  
出典研究は対象資料の性格を見極  
める上で重要な方法である。しかし、そ  
の方法だけで国語資料の性格や価値、さ  
らには国語史研究を進めることはできな  
い。ある国語資料が現在の国語史研究に  
有益としても、当該の資料が作られた時  
の目的があったはずである。『色葉字類  
抄』はそもそも何を目的に作られたのか。  
この根本的課題に挑戦したのが藤本氏の  
近著である。平安末期成立のいろは引き  
の国語辞書である『色葉字類抄』は、先  
学の研究により、変体漢文で書かれた古  
記録の言語、すなわち記録語との関連が  
論じられていたが、藤本氏はその実質を

明らかにすべく、古記録をはじめとする  
変体漢文資料、漢文訓読資料、和文資料  
等、さまざまな資料を調査・分析し、『色  
葉字類抄』が有する潜在的なポテンシ  
アルを複合的かつ総合的な手法を用いて最  
大限に引き出そうとする。記録語の採録  
は『色葉字類抄』編纂の目的のひとつだ  
が、それにとどまらない多様なニーズに  
応えようとする編纂の意図があるはずで  
ある。その多様なニーズを、藤本氏は「書  
記需要」という概念を設定して理論化し  
ようとする。昨今、言語資源研究が盛ん  
だが、その方法論にも貢献し得る著作と  
言えよう。

▶池田証寿(北海道大学)

## ことばの地理学 —方言はなぜそこにあるのか—

大西拓一郎

大修館書店  
2016年8月



圏論の記念碑とも言うべき柳田国男著  
『蝸牛考』の解釈も、北前船が方言を運ん  
だという通説もバツサリと切り捨てられ  
ている。

周囲圏批判に関しては、著者が学会発  
表の席でたびたび自説を展開し、そのた  
びに出席者から批判的の質問を受けてい  
る。しかし、「同じ場所が繰り返し言語変化の  
出発点になることは、きわめてまれでは  
ないか」(181ページ)のような、今後の  
議論の対象になりうる指摘が随所に見ら  
れることは重要である。

『日本言語地図』にはさまざまな周囲  
分布が見られることを柴田武ほか多くの  
研究者が指摘している。著者はそれらの

分布についてはどう考えているのだろう  
か。

故徳川宗賢氏は、「私には他人の論文を  
批判する発表が多い」と言っておられた  
が、学問は過去の成果を批判しつつ発展  
するものである。本書は方言研究界に新  
風を吹き込む著書と言えよう。著者のラ  
ジカルな説に賛否両論が巻き起こるこ  
とを期待したい。

そのほか、方言学でよく話題にされる  
トピックスを平易な文章で解説しており、  
読者の興味を惹きつける。

参考文献も豊富で、方言学を専攻する  
研究者にも学習者にも便利である。

▶佐藤亮一(国立国語研究所名誉所員)

**こ**の本を著者から頂戴したとき、一  
読してショックを受けた。方言周

## 語彙力を鍛える 量と質を高めるトレーニング

石黒圭

光文社新書  
2016年5月



検定ビジネスの根幹をなす、上級は圧  
倒的な量、という昨今の“量マッチョ主  
義”に確かな警鐘を鳴らす一冊であると  
ともに、ただ「記憶する」ことだけが量  
を獲得していくものでもない、というこ  
とを知るにも良い一冊です。

たとえば、上位語と下位語という概念  
であったり、類義や対義以外にも語種や  
語構成など、ひとつのことばが全体のな  
かのどこにあるのかをマッピングする思  
考を、平易な言葉で説明していきます。  
言葉が整然と、三次元的に位置づけられ  
ていきます。自然とこれまでの日本語学  
の成果も入ってくるようになってい  
るところは、無知な私には頭の霧が晴れてい

くよう！日本語学の良き入門書でもある  
かもしれません。

コロケーションの情報やオノマトペ、多  
義語など運用する際になにを起点として  
語彙を選択するかという「表現」面と、受  
け手がどの表現を起点に読むかという  
「理解」面を、どの節でも丁寧に分けて考  
察しているのも大事なポイントです。専  
門家でも一緒に話してしまいがちな  
部分です。

石黒さんの関心のある、野球や将棋な  
どの身近な用例引用なども読んでいて楽  
しいです。そこまでチェックしてるの！?  
とツッコミながら読めます。

▶サンキュータツオ(一橋大学)

**語**彙力＝語彙の量(豊富な語彙知識)  
×語彙の質(精度の高い語彙使用)  
と定義し、語の運用の重要性を説いた  
ことがこの本の肝です。

## 編集後記

懇親会で隣りあった人と何を話してよいか、話題に困ることがあります。そのときの鉄板ネタが二つあります。一つは食べ物の話、もう一つは言葉の話です。両者の共通点は、とても身近で、私たちの生活に欠かせないものだという事です。

『国語研ことばの波止場』第1号をお届けします。日本語という言語を包括的に研究する、世界で唯一の専門研究機関である「国語研」の活動の最前線を、言語の専門家でないみなさまに広くお伝えしたいと願い、この研究情報誌を創刊しました。

日本社会のなかで生活されているみなさまにとって、日本語は空気のように感じられているでしょう。しかし、そこには、日本社会のコミュニケーションを成り立たせる不思議な現象がたくさん隠れています。そうした不思議な現象を掘り起こして体系的に研究したり、言語現象を掘り起こす基礎となる言語資料を整えたりするのが、私たち「国語研」の役割です。

「国語研」は「国立国語研究所」の略称です。「国立国語研究所」という名前は重みがある半面、近寄りがたい堅苦しさがあります。しかし、そこで行われている研究は、私たちの生活に深く関わることばかりです。

この研究情報誌『国語研ことばの波止場』は、今後何号にもわたり、現在「国語研」が遂行しているプロジェクトを一つひとつ詳しく紹介していきます。

私たちの生活の身近にある「言葉の不思議」に興味を抱き、懇親会の席で気楽に披露していただいたり、日本語について深く知るきっかけにさせていただいたりしたら、これほど嬉しいことはありません。愛される研究情報誌を目指し、編集委員一同、努力してまいりますので、ご愛読・ご支援をお願いいたします。

(石黒圭)

## 次号予告

## 日本語の個性

方言研究・  
対照言語研究・  
日本語教育研究

## 国語研 ことばの波止場 vol.1 (創刊号)

平成29(2017)年3月30日発行

編集 国立国語研究所研究情報誌編集委員会

発行 国立国語研究所  
〒190-8561  
東京都立川市緑町10-2  
電話042-540-4300(代表)

協力 くろしお出版

デザイン 黒岩二三[Fomalhaut]

無断転載を禁じます

©National Institute for Japanese Language and Linguistics